

おしゃべり通信

No. 228 H30.11.15 発行 如春会 浦田医院

～H29年4月発行 日本小児科医会会報特集～



スマホパンデミック!⑤

<スマホ社会の落とし穴>



1. 現代文明の副作用? -③

2) 子供の成育環境がどう変わったか? -②

① 電子画面接触早期化の加速

日本の母親のスマホ所持率は94% (2017年1月現在)。

TVや携帯は大人が使うのをそばで見ている、つまり「受動的」だったという事もできるのですが、偶然にでも触れば、或いは動かせば画面が変わる高機能モバイルには、生後3か月児でも「能動的」に関わる事ができます。

幼児期にTVに真剣に見入る子供たちに対し「集中力があるのだ」と勘違いする向きは今でもあります、これはただ単に「幼い子供であればあるほど、光に惹きつけられる傾向が強い」というだけの事だという事実も既に証明されています。

② 長時間接触の加速

「携帯=持ち歩きができる機器」が簡単に手に入るようになった事で何が起きているか?

もう日常になってしまい、いつでも手から離せないもの・持っていない方がおかしいものになっていますよね。子供達は毎日、実に学校の年間授業数の2倍以上にあたる時間をメディア接触に使っています。ベッドの中・風呂場・トイレの中・移動中の電車・自家用車・タクシーの中は勿論、自転車に乗りながら・食事しながら・歩きスマホ・授業中にもいじっている!

そして、これが手元にないと「なんだか不安」になっています。これを「スマホ依存」と呼ばないでなんと説明するのでしょうか?

③ 実態把握が困難

子供達の中には、幼児であっても両親がぐっすり眠っている時間帯に両親のスマホやPCを触っている者もあり、一方、それに気が付いていない保護者もいるとの報告がある位に、子供たちとこれら機器との接触事案は深刻です。貴方はお子さんのメディア接触についてどのくらい正確に把握していますか?

教育機関が実態調査をしようとしても結局は自己申告になる事が多く、大人と呼ばれる私達は、子供達のこれら電子メディア機器使用実態の全体像を把握できていないのが実情です。

また、子供の行動は「家庭内で起きること」の多くにおいて一義的には母親の行動に連動することが多く、現在多くの教育機関でなされている実態調査と呼ばれるものの視点に欠けている点は、保護者の動向が把握できていないことです。この保護者世代は、これら電子メディア機器が日本に導入された第一世代に相当してします。この電子メディアとの関連事象においては、女性はメール・SNSなど文字を使うアプリに傾倒する傾向が見られ、一方男性はゲームに傾倒する傾向にあります。

父親というものは、一義的には「子供が家庭から巣立っていこうとする時に社会との繋がり方を指示してくれる者」である筈だったのですが、既に父親自身が電子ゲーム依存である家庭も見られ、その裏返しとして「子育て行動」における父親の責任・権威・威厳、引いてはその存在を希薄にしている傾向が強まっていることが報告されています。

巡り巡って、母親の育児不安は増悪し、子育て環境としての家庭が不安定になるという結果がもたらされることも散見されるのです。つまり、子供とメディアの関係を修正しようとするならば、家庭内で唯一「大人モデル」として存在する保護者の電子メディア機器接触の状況から観察・見直しを考えていかないと、本当の根本的対策にはならないといえるでしょう。

子供は大人が作った環境で生育しているのです。その意味で子供の問題は「大人の責任で発生」しているのであり、「子供だけ」の問題として取り上げることはできないという自明のことに、気が付くことが先決と言えるでしょう。

(以下次号)

(平成29年7月 S.URATA MD.)

感染症 up to date! ~風疹②~ (三日はしか)

母体の保有免疫抗体価が低いと「胎児性風疹症候群」が発症します。

「先天性(胎児性)風疹症候群」も昔から知られていた病気で、だからこそ将来妊娠して子供を持つであろう中学二年生女子に限定して定期予防接種が行われた時期がありました。ところが母体にはちゃんと免疫ができていのに、まだ免疫系を発達させていない胎児は、ウイルスの影響をまともに受けてしまうことが証明されてしまったのです。それが数年前に関西地方を中心に話題になった、胎児感染の実態です。

よって今日的な風疹の予防については、以下の理由で、見直しが必要です。社会全体で免疫を持つという協力しなければならないのが、予防接種をすることを選んだ疾病群の運命だと理解しましょう。補助金制度が確立しています。(問い合わせ先:各保健センター)

① 配偶者年齢の男性に免疫ができていないため、男性間で流行し、母体が不顕性感染。(=発症しないが感染している状態。個人免疫上の予防接種としては成功している。)

② 母体の抗体価が、概ね従来の陽性抗体基準の2倍必要。でないと、ウイルスが胎盤をすり抜けて胎児に感染してしまう。⇒妊娠希望者は抗体の確認を!

③ 感染の機会が減ると、個体の免疫の記憶が消失=永久免疫ではなくなる。⇒社会全体で抗体価の維持のための追加予防接種の繰り返しが必要。

(H30年5月 S.URATA MD)

“子ども・若者とメディアを考える会”

期日:平成30年12月14日(金)19:00~

場所:玉名郡市医師会館 3階大ホール

内容:「行動分析プログラムと子どもとの望ましい関係づくり」について

講師:八嘉小学校教諭 本島隆浩氏